事業・システムが姿を現すことになるだろ。

９月５～６両日は、労協連30周年の記念企画。５日の記念フォーラムには、内橋克人さんが記念講演いただくことが決まった。協同総研会員各位も、ぜひ翌日の記念レセプションも含め、参加いただくことを切に願う。

研究所だより

榎本 木綿／渡辺 亮子

プルサーマルを止めるための子ども署名

2009年６月30日

愛媛県議会　議長　帽子敏信様

請願　伊方原発のプルサーマルは、やめてください。
原発で電気を作るには、ウランをもやさなければなりません。
でも、ウランをもやすと言うことは、広島に落ちた原爆と同じウランをもやすことです。
そして、ウランをもやすとできるプルトニウムというものは、ウランの何万倍もの放射能を出すもので、地球上で一番毒性の強い物質です。
これから伊方原発でプルサーマルを始めるということは、はじめから
プルトニウムとウランをいっしょにもやすことでとても危険です。
安全と分らないものを使って、ぼくらの未来をなくさないでください。
ぼくら子どもや、生き物が安心してくらせるような未来を考えてください。

（原文のママ）

これは愛媛県久万高原町に住む小学５年生の男の子によって書かれた「プルサーマルを止めるための子ども署名」の請願文書です。彼は伊方原発へのMOX（ウラン・プルトニウム混合酸化物）燃料の取り付け工事の認可の話を耳にし、母親に「それはなに？」と尋ねたところ、小５の子に原発やその周辺の問題をどう伝えるか考えあぐねた彼女はつい、「うーん…。あんまりこどもには言いたくないんやけど、イヤーなもんがきたんよ」と省略し、答えたそうです。

私たちもかつて多かれ少なかれそうであったように、子どもから大人へ成長するそれこそほんの一瞬の間、過敏なまでに冴えわたった感性や真実を射抜こうとする正義感が子どもを目覚めさせ、一気に視界を広げるそんな瞬間があるものです。彼はすぐさま図書館から原子力やプルサーマルに関する本を借りて読みあさり、やはりこれは「危険なモノだ！怖がっているだけじゃなく何かできることは･･･」と考えました。

もともと彼のご両親は私たちが今年３月

に『田舎で働き隊！』でお世話になった研修受入先のひとつで、自然と人の相互依存・共生関係の本来の姿を求め、人びとが集う場を創ることを目指し実践している、いわば森の管理人さんです。ここは植林活動など森の整備をしたり、子どもたちの体験学習の場として活用したりと、人びとの出会いの場と多様な生物が生息する豊かな自然が調和した場所です。こうした環境に育まれてきた彼にとって、自然や他の種の動植物と共生するためのルールを守ることはごく当たり前のことであり、人間のエゴで環境を汚したり、破壊することは他のものたちへの義務と責任を怠ったとても身勝手な行為に思われたのかもしれません。

「プルサーマルを決定したのは誰か。県議会の大人の人にもう一度考えなおしてもらおう！」

彼と彼の友だちはたった５日の間で288名にもおよぶ子どもたち（20歳以下）へ自分たちがプルサーマルはいやだと思った訳を自分たちの言葉で説明してまわり、それを理解し賛同できた子にだけ署名を頼み、そうして集められた思いを彼が代表して愛媛県議会へお願いに行ったそうです。

子どもたちのこの行動に困惑を覚えた大人たちもいたことでしょう。しかし、子どもたちがここまで自分たちでものを考え、自分たちの言葉で主張し、人に伝え、行動している以上、この子たちの思いを守ろう、応援しようと真正面から受け止め、支援にまわった大人たちも彼の両親をはじめ大勢いました。

結果、５名の紹介議員を得て６月30日に請願書を愛媛県議会に提出し、７月６日に常任委員会で審議されましたが、10日の本会議の決議では賛成少数で否決とされました。

正直、勝手な大人の都合や思惑が入り混じった世界をも垣間見たであろう今回の一件は11歳の子には少々荷が重かったのではないかなと思われました。しかし、彼にとっていちばんこたえたことは否定や批判やましてや否決ではなく、「無視」されることだったそうです。勇気を以って自分が発した声を大人から無視され、存在しないもののように扱われることは耐え難かったそうです。

自主性をもって学び、主体性をもって意見を述べることは、私たちが日ごろ子どもたちに教えていることです。これは自己の存在を確認し、他者との関係を創る上での基本的な権利であり、尊厳を築くものです。そうした権利を無言で抑圧するということは、いま我われが住んでいる社会をもののいえない社会にしているということのほかなりません。

いささかいつもの「たより」とは異なりますが、８月に考えるにはよいテーマかと思います。ものを自由に発言し合い、異なる意見にも互いに耳を傾け、さまざまな人や種が共生していく社会こそが平和な社会であり、私たちが彼らに渡していかなければならない大切な財産のひとつではないでしょうか。11歳の少年からさまざまに学んだ、これも田舎体験のお話のひとつです。

８月から新しく協同総研事務局員として渡辺亮子さんが加わりました！新体制のもと、スタッフ一同さらなる研究活動につとめたく思っております。どうぞよろしくお願いします。

ごあいさつ

８月より協同総合研究所事務局に入局いたしました渡辺亮子です。企業の文化部門を経て、労働組合日本音楽家ユニオン専従職員として３年勤めていました。前職では争議、へき地小規模学校でのボランティアコンサートの運営、オーケストラ・ユニオンの事務局、労働実態調査などを担当していました。ちなみに学生時代の専攻は近現代美術です。

美術専攻芸術畑の人間がどうして協同労働に？と不思議に思われると思います。美術というとアトリエや美術館の閉ざされたハコの中での営みと思われるかもしれませんが、意外とそうでもありません。

周知のとおり、関東大震災直後の東京には生活に最低限の機能だけを備えた無数のバラックが軒を連ねました。この光景を目の当たりにした芸術家たちは自身の技術や能力を活かせる仕事を起こそうと立ち上がり、二つの前衛芸術グループが協働して「バラック装飾社」というグループを結成したのです。このバラックに華を添えるべく、カフェや書店などを次々と装飾していきました。残念ながら、メンバー間の方向性のちがいによってその活動は長く続きませんでしたが、20世紀初頭に起きた前衛芸術運動にはこのような協同の兆しがいくつも点在しています。むしろ協同によって運動が展開していたと言っても過言ではないかもしれません。そして、その兆しは今も続いています。例えば、ある詩人は声や言葉を命と深いつながりのあるものと考え、詩の朗読やワークショップを行う地域に根ざしたカフェを運営しています。活動は単なるカフェ運営にとどまらず、おにぎりの炊き出しや夜回り、元ホームレス・生活保護受給者による紙芝居グループのNPO化、運営まで幅広いものです。また昨今では、「コミュニティ・アート」という言葉が流布しているように絵や彫刻を製作するのではなく地域資源を活かし、市民参加によって成立つ表現が増えてきました。

このような芸術の研究や動向を基に労働問題に取り組むにつれて、協同労働の現場に自身の生活の軸を置きたいという欲求が自然と強まりました。私にとって協同労働の魅力は、市民社会の実現であると同時に、現場で生じるコミュニケーションやプロセスです。このコミュニケーションやプロセスの細部、ひとの心の動きやひだのようなものを他者へ伝え、記録していくのはむずかしい作業ですが、専門的な研究のお手伝いと併せて取り組んでいきたいと考えております。協同労働初心者ですが、ご指導ご鞭撻の程、何卒よろしくお願い申し上げます(渡辺 亮子)。